術の極致である。

自然の美、人間の美にせよ、この世のものは皆同等の基盤の上に立つものであり、特に人間的美は虚心坦懐、その道の弛まざる修錬によってのみ得られるのである。剣道は、我々祖先の育んでくれた大いなる芸術なのである。

## 4　人と剣風

### （一）剣は人なり

「目は口ほどにものをいい」という諺があるが、目の働きは実に微妙なものがある。心の働きが目に現れるのは当然であろう。剣道においては目付けの大事さを強調される。

フランスの思想家ビュッフォンは「文は人なり」といっているが、実に千古の名言である。剣もまた人の心の現れであると考えられるので「剣は人なり」といえる。人それぞれの性格に応じた剣風を持っているのも面白い。大胆な人、臆病な人、正直な人、要領のよい人と、それぞれ自分の個性を生かして稽古をするものである。

また、師匠の心が、長い間の稽古のうちに弟子へ知らず知らずのうちに移行する。親に似ぬ子は鬼子というが、この鬼子にはなかなかなれないものである。人格の高潔な師匠に接し、教えを受けることは大切なことである。互いに剣を交えるだけで、心の奥深くもっている高潔な心の琴線に触れ、感化されるものである。

道元禅師の『学道用心集』の一説の「不ンバレ得ニ正師ヲ一、不レ如カレ不ルニレ學バ」の教えのとおりで、よい師を得ることが大事なことである。

この良師を得ることの大事さを、佐藤忠三範士は自著『剣道と人生』の中で次のように記している。

「指導者になる人は、剣道を通じて人間を教えるのが主たる目的である。即ち、剣をもって、これを習う人によい薫りをつける、所謂（いわゆる）薫育という重要な使命を持っている。故に指導者はその道に熟達し、打突の道を上手にすることは勿論（もちろん）必要であるが、それと人格を兼備する人たることを条件としなければならない」と指導者の心得を記している。

今は、誰でもが段を取得すれば指導者になれると思っている人が多いが、正師にはなかなかなれないものであることを知るべきである。

剣道の教えのなかに「心正しければ、剣また正し」という言葉があるが、これは自己の養成の

道であって、邪心を正し、無理な技を制することを表現しているのである。

私たちが稽古を願って、打たれても気分が爽快な時がある、と感じたり、己れが打っても稽古後に、何となく後味の悪い思いを経験することがあるが、試合においても同様、このようなことは、相手の人間的に高潔な人に接した場合と然らざる場合との相違から生ずるものであろうか？

己れの心の貧しさからなのだろうか？

実に心の働きに微妙なものがある。剣道は身体の運動と共に、技を通して心を正するものであることを忘却してはならない。

剣は己れの心の鏡である。

（二）「君子剣」と「小人剣」

剣道には「打たれて稽古をしろ」という教えがある。打たれることは自分の隙を相手の人が教えてくれるもので大いに感謝しなければならないが、凡人はどうしてなかなかそうはいかないものである。打たれればすぐ打ち返したくなる。そのうちにお互いがむきになってしまう。これでは相互の否定であり、剣の道とはいえない。

剣道は竹刀打ちの争いのみではなく、理合にあった心と心との争いであり、人格と人格の攻防ということになる。

各人の剣風は、その人となりの表れであり、心の卑しい「小人剣」、針谷夕雲のいう「畜生心」、「畜生剣道」にならないように心掛けたいものである。

針谷夕雲の畜生剣道とは、「己れに劣れるに勝ち、まされるに負けて、同じようなるには相打ちより外はなくて一切埒のあかぬものである」といっている。

次に、直心影流の島田虎之助は、「君子剣・小人剣」について次のように記している。

「今人ありて両々相当るに、その一人は即ち虚を視て進んで之を撃ち、実を察して退いて之が備をなす。静かなること山岳の如く疾きこと風雨の如く勝ちて喜ばず負けて怒らず、我より強き者には吾従いて之に師事し、我より弱き者は我受けて之を教育す、これを之、君子剣という。

一人は即ち高歩して進み大呼して走り、勝つや欣然たり、負くるや我憮然たり、肩と足とを併せて之を乱撃妄刺す。これを之、小人剣という」と。

よくよく味わうべき事柄である。